98　誌上発表　R. J. リフトンにみる「親試実験」

小曽戸明子
おそど未病研究室

Robert Jay Lifton（1926～）の著書『DEATH IN LIFE』は，その副題にSurvivors of Hiroshimaとあるように，広島の被爆生存者に精神医学の立場から面接し，その生々しい証言をもとに世界に訴えた記録である．生まれ育ったニューヨークで1967年に刊行され，邦訳は1971年である．著者の意思により面接のデータはなるべく生のままのものを使うようにしたという．専門的な学術語などについては土居健郎が依頼され助言している．

「日本語版に寄せて」の中で「私は広島を全人類の経験にしたいと望んで，この研究をまとめた」と記すが，そこまでに至る心理的抵抗について「日本に関心を寄せるようになって10年もたって初めて，しかもその間，合わせて四年も日本に住んだ後に，やっと広島を訪ねてみる気持になったのである．それは1962年の4月上旬のことであった」とあり，着手に至る複雑な心境が伺われる．それまでに研究の根拠地としていた京都から日本滞在を延長して広島に移り住み，被爆者の個人面接という形で研究を進める．対象を二つの異った集団に分け，第一の集団は広島大学原爆放射能医学研究所の無作為抽出によって選ばれた31人，第二の集団は原爆問題にとくに強い発言権と主張を持った人たちで，主として学者，作家，医師，政治的指導者など42人の対象者から成り立っている．結論から言うと，これら二つの集団の間に，被爆問題に対しての反応の仕方に著しい差異は認められず，両者に共通した心理学的テーマが存在したという．初めは個人的紹介に頼りながら，徐々に広島の知人や団体を通じて，それぞれの被爆者へと紹介状の環を広げてゆき，時には広島の研究者の協力を得て，二人で家庭訪問を行った．まず彼が名刺を差し出してリフトンを紹介し次いでリフトン自らが名刺を差し出して，短い会話のうちに研究目的を説明して協力をお願いする．ふつう第一回の会見はそこまでで，正式の面接はそのときの約束にもとづいて，広島の中心街近くのリフトンの事務所で改めて行われた．すでに日本に住んだことがあり，日本語を多少とも話すことができたということが，協力を得る上で役立ったというが，それよりも重要なことは，リフトンが協力者及び被爆者に，単なる学問的関心からではなく，一つの倫理的使命感を持って取組んでいることを伝えることができたことであるという．たまたま日本の平和象徴についてリフトンが書いた論文の日本語訳が，市販の日本の週刊誌にのったことも幸運な偶然であったという．全般的に好意的な協力を得て，面接はふつう二時間にわたり，相互に自由な意志疎通ができるように通訳の訓練を受けた助手の助けを借り，原則として各被爆者と二度の面接を行う．リフトンの設定した質問は，その人がいかなる原爆体験を持ち，17年後のその時点で如何なる意味を持っているのか．とりわけ放射能後遺症という問題についての被爆者の心の中の懸念，不安，恐怖など．そしてそうした自らの体験をいかに克服しようとしているのか，被爆者意識とは何か，などであった．被爆者の同意を前提に面接はすべてテープに収録し，声の記録とローマ字さらに英文と日本語の記録を持つことになったという．生々しい記憶に対峙するリフトンも徐々に学問的精神的ゆとりを持ててゆく．「もし私の祖父母が東ヨーロッパからアメリカへ移住していなかったら，私は強制収容所の犠牲者か生存者になっていたかもしれない」というリフトンのまなざしは切実であり，体験への普遍的克服の研究に学ぶべき深きことが宿されているヒロシマへの強い意思が伝わってくる．

「親試実験」ということばは，広島出身の医師・吉益東洞（1702–1773）の系譜の先に今なお息づいている臨床姿勢・方法を示していると思われる．